がった背中。見送った後ろ姿が寂しそうでした。

人口減少が著しい竹田市。人口減少率は、県下の市のなかで第2位の高さです。昭和35年に5万7千人いた人口も、今では2万人。竹田市、荻町、久住町、直入町が合併して新しい竹田市になって今年で17年目。合併当時の人口は、2万7千人。超過疎化の厳しい現実が突きつけられています。

当然、過疎化だけが問題ではありません。少子高齢化です。現在、竹田市の高齢化率は48%。人口に占める85歳以上の割合は、全国の市のなかで一番高い。これは市民の長生きを証明するもので誇らしいのですが、一方で、子供の割合が顕著に減少しており、社会構造がかつて経験したことのないものになっています。市町合併した平成17年度の出生数は、もうすでに140人と極めて少ない。さらに現在、令和2年度の出生数は94人。今年度は80人台の予想。竹田市の少子化は深刻なのです。

そこで、これからの竹田市は、この流れに「抗う政策」と「合わせる政策」の2本の支柱を立て、市民一人ひとりが豊かに暮らせるように自治体を再設計し、構築し直さなければならないと考えています。人口減少に「抗う政策」として、企業誘致や定住促進などの施策が挙げられます。また「合わせる政策」としては、医療福祉施策の充実や学校教育体制の再整備などがあります。竹田市には、この一見相容れないような2つの政策を、自治体内で調整統合していくことが求められています。

昭和レトロがエモい！

サトウ海事事務所 代表
27回生　佐藤　睦典

そうしていくうえで重要なのが、どこに行政運営の判断基準を置くかです。これからの竹田市は、これまでの市政に新しい視点を加えます。周りからいただく評価を高めていき、右斜め四十五度を見上げて行政運営することも大切です。理想を忘れてはいけません。しかしながら、現実から目をそらさないことも大事。足元を掘れ、そこに泉ありと言います。市民自身の暮らしに注目し、その課題を的確に捉え、しっかりと改善していく。そういった政策を展開しながら、市長として責任を持って竹田市を運営していく所存です。そして、いつか、市民から「竹田市で生きていて幸せです」と言われる日がくるように。

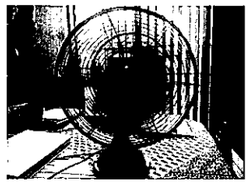
渾身の力で邁進しますので、引き続きましてのご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

一昨年、父が亡くなり品物を整理していると物置からガラクタが出てきた。一つ一つ見てみると、面白いものや懐かしいものがたくさんある。いわゆる昭和レトログッズだ。昔使っていた日用雑貨や父が若い頃使っていた文房具やカメラ、本などなど。今、平成生まれの若者たちが、昭和の時代に熱狂しているという。彼らは口をそろえて〝エモい〟と言っているらしい。「古くさいじゃなくて逆に新しい」「昔っぽいのが逆にいい」今その良さが当時を知らなかった世代に見直されているのだ。

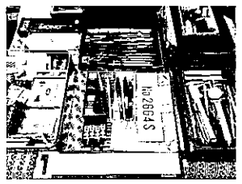
昭和レトロとは、昭和時代のノスタルジックな雰囲気や憧れを指す言葉で、エモいとは、感情が揺さぶられた時や、気持ちをストレートに表現できない時、「哀愁を帯びた様」「趣がある」「グッとくる」などに用いられるそうだ。ゴミ収集に出そうと種類ごとに分けているうちに、何かメンテナンスして使えないものだろうか、という気持ちになった。屋根裏で埃まみれになっていた蓄音機、錆だらけの工具類、古臭い文房具。捨ててしまえばそれまでだが、何か使い道がないかとあれこれ考えるのもなかなか楽しいものだ。思いを巡らしながら並べてみるとちょっといい（エモい）感じになってきた。

今でこそ古臭く思えるが、これらのものは、当時としては最先端をいっていたはずで、昭和世代にとっては憧れだったものだ。それを古くなって使えなくなったからといって、なんでもポイポイ捨てるのは、いかがなものか？と思う。「物を大切にする」「物を役立てる」、壊した

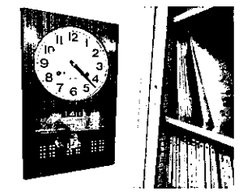
はじめは何だかわからなかったが、調べてみると炭火アイロンだとわかった。錆をとってきれいにしてみた。



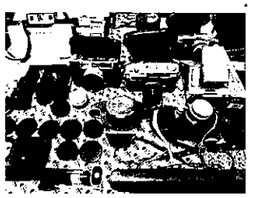
昭和初期の製造と思われる三菱電機の扇風機。もうすぐ100年ぐらい経つと思われるが、現役で頑張っている。



父が使っていた文具類。小学校の時に流行った「コールドペン」も出てきた。ペン類などは事務所でも使うことにした。



50年以上前に使っていたSEIKO30DAYゼンマイ式の振り子時計。屋根裏で眠っていたが、修理して、現在事務所で活躍中。



カメラマニアでもないのに集めていたらしいカメラ用品。机に並べてみると結構な数になった。ガラスケースに入れて陳列しようかなあ。

屋根裏で眠っていたコロンビア製の蓄音機。埃まみれだったが、レストアして聴けるようになった。

可愛い子には旅をさせよ

現在旅先でバトンタッチ中の二人の子供の母親
28回生　岩本　ANETT

昨年11月、久しぶりに友達に会うことができ、ゆっくり色々な事について語らいました。その折、中学1年の息子を「島留学」させたいと伝えたら、かなりの批判が返ってきました。あんなに小さい子供にはママが必要だ。息子のために仕事も辞めるべきだ。と言うのです。正直私は驚き、お互いの文化の違いの大きさに気づかされました。

欧州育ちの私にとって、小さい頃から「一人で旅すること」はその成長の過程に欠かせないことでした。私は既に小学2年の頃から祖父母の家まで3時間以上もかけて一人で長旅をし、その旅で色々な人と知り合い、たくさんのお話を聞かせて頂きました。

ドイツでは小学3年くらいから、夏休みに3週間ほど親元から離れ、大学生と一緒にキャンプ生活をしていました。そのおかげで皆が一回り成長して帰ってきたのでしょう。現在のドイツの高校生の中には、海外留学する若者も少なくありません。大学生の就職にはよく海外体験が必須条件となっています。

高校2年の私が留学したデンマークでは、作家のアンデルセンのモットー、「At rejse（旅する事）er（は）at leve（生きる事）」のごとく、「efterskole」という制度を設けています。中学生は、1年以上地元の学校から離れ、多くの若者と一緒に寮付きの学校で勉強できるという制度です。

中世の頃から、職業技術を身につけようとする若者は、3年以上も故郷に帰らず、しっかりと腕を磨き、マイスターから次のマイスターへと修行の旅を続けるという制度がありました。現在でも興味を持った若者が、その制度を利用することができます。

日本での暮らしも20年以上になりますが、今もなお、日本の若者の海外ばかりでなく、国内旅行に対しての興味の無さについて驚いています。以前、高校で教師をしていた時のことですが、地元以外の生き方や言葉などを認めず、時には馬鹿にしたりもする生徒が多いことにびっくりしました。

日本の教育制度を変えようとされていたある教育者の方までが、実家のある親元と故郷だけが大事だ。とおっしゃっていました。私の知る高校は保護者なしの旅行を一切禁止しています。お酒とたばこのように、そのような一人旅は成人になってから。という考え方のようでした。

しかし、日本にも「可愛い子には旅をさせよ」という諺が存在します。他の諺と違い、西洋の直訳ではなく昔の日本人の経験知の結晶といってもいい言葉です。いつもの馴染んだ場所に留まらず、新しい場所に訪ねてゆき、知らない人と話したり、知らない味を味わったりすることで視野も広がり、考え方も柔軟になり、人も成長していくに違いありません。

この激動の時代、今こそ日本にはそんな人材が必要です。ならば、子供の旅を、積極的に、そして心をこめて応援したほうがいいと思います。

右が筆者

「あした」の「あ」

元竹田市副市長
29回生　野田　良輔

四才になる孫が私にカルタをしようと言ってきた。平仮名もよく覚えていない子と一対一の勝負、圧勝して当然だ。結果は、少し甘い私が四五枚、孫が五枚。しかし、何回も勝負を続けていると、意外なことがわかってきた。私は当然に平仮名の字を探す。対して孫は別の視点で勝負してきているようだ。「桃太郎～」は「も」だが、孫は黄色い衣装が目立つ札を探す。孫にとって「あ」は、「鬼の赤いパンツ」が見えたら「あ」に間違いない。そのうち、重なった下の札の赤いパンツが見えていたら、孫の手柄になっていく。

私は完全にロジカル思考だ。誰がなんと言おうと、「あ」は「あ」、これで六十年以上も大過なく処理してきた。孫は、デザイン思考だ。「あ」は赤く、あのあいきょうある鬼の好きな色だ。

同じモノを別の視点で見て勝負する。最近まで似たような体験をしてきた。

昨年、八年の任期を終えて竹田市副市長を退任した。市長を支え、市議会と議論しながら、市民や市職員、キーパーソンと対話し、たまには権限と責任でエイヤと物事を決めつつ、走ってきた。八年が長い、とは思わなかった。だが、途中で物事の決め方・捉え方を変えないといけないことに気がついた。

副市長就任時の私はまだ五十歳代、当初はそれまでの知識だけでなんでも乗り越えた。誰がなんといっても「あ」は「あ」、五十年以上それで間違いなかった。だが、段々と若手と視点が異なっていることに気がついた。同じモノゴト・客観データなのに捉え方、プライオリティ（優先順位）が異なる。わかりやすい例でいえば、我々は経済や成長を優先する。明日は昨日より前向きであるはずだ。

しかし若手は違う。環境やエネルギー、サスティナビリティといった価値観を大